



CASA 連続市民講座 第19期 地球環境大学

課外講座「大阪管区気象台の見学」

とき：2011年8月8日(火) 13:00～15:30

場所：大阪管区気象台

灼熱の太陽の熱気がアスファルトから反射する真夏日、好奇心がまさに打ち勝って、大阪管区気象台の見学会に参加しようと、大阪合同庁舎4号館へと急ぎました。玄関前に到着すると、オヤ？いつもの地球環境大学とは異なる雰囲気！そう、夏休みというチャンスを活かそうと、子供さんやその父母も多数参加。文字通り老若男女合わせて、活気ある見学会が滑り出しました。

■ 説明

16階の会議室にて各部署の気象官の方から、気象台における業務についてお話を伺いました。

<気象台の仕事>

天気予報を作成するための気象観測、また気象に関する注意報や警報の発表、地震や津波情報の発令、さらには世界規模の気候変動監視に関わる情報提供も行っているそうです。

<地震について>

現在、全国の地震活動の監視は、東京にある気象庁と大阪管区気象台の2か所で行われ、仕事の内容も同じです。震度1以上の体感できる規模の地震については、発生後、緊急作業を経て約1分後に場所と規模、さらに津波の発生が予想される場合は津波情報を発信します。

震度1以下の地震についても、日本全国に配置された震度計により検知し、地震精密解析を行っています。たとえば、阪神淡路大震災後、小さい地震はまだ続いているそうですが、回数は減っているそうです。

私たちの最大の関心ごとは、なんと言っても近い将来起こるとされている南海大地震ですが、大阪市内の場合、緊急地震速報後約30～35秒で、震度5強～6弱程度の地震が来る可能性があるということです。皆さん、その時たまたまTVの画面とにらめっこしていることを期待しましょう。また地震による津波と台風による高波とのメカニズムの違いについても教え

ていただきましたが、津波の方がより大きな破局的なダメージを与えることがよくわかりました。

<警報、注意報が発令されるまで>

次に、気象庁制作の映像資料を見せていただきました。2010年5月より、警報・注意報発令システムが細分化され、市町村ごとに発表されるようになりました。TV画面ではもちろんの事、インターネットから検索ができ、携帯からもアクセス可。例えば大雨の場合に出される発令は、「情報発表」は1日前、「大雨注意報」は12時間前、「大雨警報」は2～3時間前となっています。またこれらの情報に対して私たちは、避難場所や市町村のハザードマップの確認をしておきましょう！ところで、「自分だけは大丈夫」「今まで大丈夫だったから」というのはダメだそうです。

<気象観測の手法>

風向、風速、気温、雨量、湿度などの地上気象観測、室内計測器による観測、雲の様子などは目視による観測、アメダスによる気象観測、レーダーによる気象観測(高安山観測所)、潮汐観測(天保山、淡輪の2箇所)。

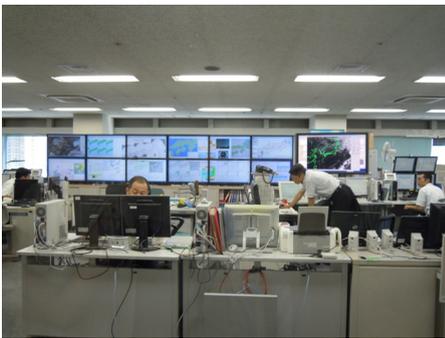
<参加者からの質問に対する回答>

- ・昔使われていた百葉箱は、現在気象台では使用していません。
- ・黄砂の有無については、目視で観測をしています。

- ・竜巻情報については、起きる可能性を予報するものであって、大阪では、今のところ被害は出ていません。
- ・降水確率とは、雨が降る確率であって、雨の強さや量は関係ないので取り違えないようにしてください。

■ 見学

17階では、何台ものコンピューターの画面を前に、スタッフの方々が実際に作業されている様子(写真)を見ながら説明をうけ、各部署を案内していただきました。



<予報課 >

東京にあるスーパーコンピューターで解析された結果を基にして、毎日、近畿地方の予報、そして各地方、たとえば大阪府の予報を作成して発表します。週間天気予報専用のコンピューターもありました。

注意報、警報などの連絡のため、大阪府やTV局に、自動でつながる電話も設置されていました。刻々と変化する気象の様子が赤外線と可視光線で映し出されている2つの大きな画面が特に印象的でした。また管内は自家用発電機を備えていて、停電による一瞬のストップさえ生じないようにしているそうです。

<地震火山課 >

大スクリーンに、東京で行われている作業の様子が映しだされていました。確かに、大地震発生後も、他の気象台の作業中継を目の当たりにすることができるのなら、少し安堵するような気がしました。

さて地震の際、最も重要である、P波、S波の観測結果と、それをもとにして約1分後には

じき出される震央を、2台のディスプレイで見せていただきました。また、地震情報と津波情報の発表については、東京と大阪で月毎に交代で発表するのだそうです。

<観測露場 >

気象台建物の外に野外観測場がありました(写真)。そこで雨量計などの仕組みについて簡単に説明を受けました。また気温、湿度を測定する場合は、ファンを回して機器内部に空気を送り、より正確な値を測定しているとのことでした。また敷地内には、タンポポ、ヤマツツジ、アジサイ、ススキ、ハギなどの生物季節観測データの種目となる植物が植えられていました。さらに気象台が入っているビルの屋上を見上げると、日照計や日光のエネルギーを測定する日射計がありました。

余談ですが観測露場の一角に、人の頭大ほどの黒いボール様のものが、それも人の頭の位置くらいの高さに設置されている計器がありました。これは熱射量を測定して熱中症の予報をするためのもので、環境省の所轄で設置されているとのことでした。



■ 全体を振り返ってみて

一言で感想を述べると、作業はかなり機械化されていて、予想外に職員の数が少ないのに驚きました。当然シフトを組んで、24時間態勢をとっていますが、しかしひとたび台風の接近や地震が発生した場合は、多くの職員が携わるということで、さぞかし緊迫した雰囲気なかでの職務が続き、きわめて心身の磨耗の激しい仕事であろうと想像ができました。

最後に、暑いなか貴重な時間をさいて案内して下さった気象官の方々、ありがとうございました。

(報告：長谷川 厚子、CASA ボランティア)